デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2021年（令和3年）2月7日（日曜日）（3）

八工大・安部准教授に聞く

「近隣住民のつながりが鍵」

障害者と防災を考える上では、バリアフリー環境の整備や地域住民の障害に対する理解向上など、地域全体の取り組みが重要になる。バリアフリーやユニバーサルデザインの研究に取り組む八戸工業大感性デザイン学部の安部信行准教授に障害者と地域における防災の現状や課題を聞いた。

（聞き手・三浦千尋）

「障害への理解を深めることが真のバリアフリーとなる」と語る安部信行准教授＝1月27日、八戸工業大

―現状の防災対策は障害者への配慮は十分にできているか。

十分ではないと考えている。防災システムは、町内会や子ども会を基盤に構築されていくものと考えるが、一方で、近年は近隣住民のつながりが希薄になっていると感じている。

地域防災は近隣住民同士のつながりが鍵となる。特に、災害発生直後は近隣住民の力が必要不可欠。いざというときに助け合える環境をつくるためにも、日頃から自主防災組織などが中心となり、それぞれの地域の災害時要援護者を把握するなど、住民同士で関係性を築くことが大切だ。

―障害者の避難で配慮するべきこととは。

「障害」と一言で言っても、車いすを利用している人のように一目で分かる障害もあれば、そうでない場合もある。例えば、目が不自由な人は全盲の人だけでなく、弱視や色弱の人もいる。こういった障害を理解した上で、避難所の看板や掲示物のデザインを考える必要がある。

また、心臓や腎臓などの「内部障害」の人は、疲れやすかったり、電波が体に悪影響を及ぼしたり、たばこの煙で呼吸が苦しくなったりする。目には見えない障害があることも考慮しなければならない。

―今後、どのような取り組みが必要になるのか。

障害者の「障害」、バリアフリーの「バリアー」の意味を社会全体で理解することが重要。ここで言うバリアーとは段差などの物理的な物だけでなく、制度や文化、情報、モラルなど人々の意識に関わるバリアーもある。障害のある人が「何に困っているのか」「どうしたら安心できるのか」など、社会全体が障害への理解を深めていく必要がある。意識のバリアーをクリアすることが、真のバリアフリーだと考えている。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。